

<シンポジウム>

総合討論

岡田：

それでは、再開していきたいと思います。討論時間ですが、予定では5時終了ということですが、そうすると、あと30分しかないということになってしまいますので、1時間くらいとって5時半くらいをメドにしていきたいと思います。途中で退席したい方は申し訳ございませんが、静かに退出して頂きたいと思います。

質疑応答の進め方といたしましては、わからないところを確認したい方もいらっしゃると思いますし、質問が出ているものがいくつかあります。それを順々に各報告者別に紹介していきますので、報告者は答えられる範囲で、最大5分間くらいの時間の中で報告していただきたいと思います。

報告者：

質問一つにつき5分でしょうか。

岡田：

いえいえ、まとめて5分です。幸いたくさんの質問等々がでておりますので、個別にやりますとキリがありませんから…。その後で共通する論点で議論をしていきたいと思います。

まず、水島さんの方に、質問がいくつか来ております。

では、読んでみます。佐野さんの方から「景観は一つの生活程度の中から見出せるものとして考えているのでしょうか。町並みをそろえるためには、法的な規制などはなかったのでしょうか。ということから考えると、法的な保護を抜きにして、はたして景観といえるのかどうか疑問にも思いました。」

ということでした、この点をどう考えているのかということが第1点ですね。

それからですね、横山さんの方から、

「既存の交換価値、価格ベースで見た、消費理論の現状にどのように、消費内容、使用価値の視点を導入していけばよいとお考えですか。そして、商品の作られた背景、文化、歴史などの視点が、考えられますけれども、消費者のニーズの多様性にどう答えていくのかも重要であると考えます。」

これは、コメントでありますけれども、このコメントに関わる部分で何かあればお願いします。

それから若宮さんの方からですね、

「断片的な質問になります。一番最後、どの建築物、立地点の文化、歴史との関連という文句がありますけれども、実際にはそれだけではなく、イノベーション、使用する人のセンスやひらめき、あるいはその建物が“ポツリ”と一つしかなく、選択肢がないというような、建物の性質に関わるような、もっと多様な要因があるのではないかと思いますけれども、そのあたりをどう考えたらいいのでしょうか。」

という質問ですね。それから、三重さんの方から、

「文化、歴史との関連で、イノベーションの対象であるのか決まるとあるが、使われ方の変化とは、つまり商業地区においては、地代の最大化ととらえればいいのでしょうか。」

という質問を受けております。

それからですね、水島さんと宇都宮さんを中心に皆様へということで、名和さんの方から質問がきていますが、

「ちょっと後とも関連しているかもしれませんが、ある地域における変化がマクロや周辺地域へもたらす影響、その後、制度や市場へ及ぼす影響を踏まえて、地域経済研究の必要に注目することは重要であると感じました。その場合、水島報告2-Cで言及された、大量生産型商品の供給、百貨店での販売に当たって、これら商品の生産拠点が変化しうると考えられます。水島さんの問題意識とは少しずつれてしまうかもしれませんが、この点で具体的原因があれば教えて頂きたいと思います。その上で、生産と消費都市とを別々に捉えることも可能であると思います。その場合の両者の関係、または関係の変化に注目できるのではないのでしょうか。この点で具体的にお知りのことがあれば、商品、金融、立地の3つの変化で教えて頂ければ幸いです。」

ということで、まあ、このことに関しては具体的なことをいつて頂いたらいいのではないかというふうに思います。

まだありましたね。名前が無いのですけれども、

「水島さんに対して、景観のまとまりのなさなど、

都市における郊外化など無秩序な成長と経済成長の中心性というマクロ的な要因との関係については、どうでしょうか。もし、関係があるとするならば、他地域や東南アジアとの普遍性が見られるのではないのでしょうか。」

というような質問があります。水島さんに対して一番たくさん質問が集中しております。

2 番目が三輪さんの報告に対する質問です。富樫先生から、

「日本の場合、政治体制、新聞の一紙一具体制であったのですが、戦時体制、戦後、電波統制・管理、まあテレビなどですね…。このため国家や政策が果たした役割が大きかったのではないかと思いますけれども、この点をどういうふうに位置づけられているのでしょうか。」

ということです。2 番目として、

「情報の流通が地域・空間の範囲のあり方を規定する側面と、メディア産業自体が販売、広告収入を通して、政治経済の実態に支えられている産業論的な意味でもそういう側面があると思いますが、相互の関係についてはどのように考えられておられますか。」

そういう質問です。

それからですね。宋さんの方から、

「3-C、5 ページ(レジュメ)の頭にある、ローカル性の実現という点では、地域で不満が高まるというところで、その不満についてもっと詳しく説明していただけないでしょうか。また、マスメディアの地域間格差は情報格差を生じ、それが、地域間格差などを発生させると思っていますけれども、この点をどう考えられていますか。」

という、今話題の地域間格差と情報格差の問題は関係があるかと考えるのかどうかですね。

もう一つ三輪さんに対して、

「地域メディアに対する研究に対し様々なアプローチを取っていたのが、もっと体系的にアプローチについて説明してほしい点と、なぜそれらのアプローチを選択したのかという点についていかなる理由があるのか。」

という点についてということで、最初に理論的な部分を整理していった部分がありましたね。そこと、後半の部分と前半部分のアプローチとの関係がわかりづらかったというような趣旨の質問ではないかと思いますが、私もその点は、補足してほしいのですが、その点の説明を再度お願いします。

以上が三輪さんに対する質問です。

そして宇都宮さんの方ですけれども、まず関西大学の徳永さんの方から、

「諸外国の事例と比較した場合に、日本の企

業都市形成の特徴、独自性、特異性などは、どこに求められるのでしょうか。またハーヴェイやマッシーの議論のベースとなっている事例はアメリカとイギリスの経験であり、日本の事例研究に利用する場合なんらかの留保、修正、追加などが付けられるのではないのでしょうか。この点はいかがでしょうか。」

それから、岐阜大の富樫先生の方から、

「空間的分業、企業の空間組織の中で個々の工場や事業所のポジションが変化していく点と企業都市研究においてそれをどのように位置づければよいのかということをお答え下さい。」

ということです。それから、これと関係しておりますけれども、

「旧来型の重化学工業の場合、どうしても縮小撤退が続いてきて地域での役割が低くなってきていますが、その上での企業側の事業の再構築や労働市場の再編、インフラの再評価などで企業を逆に地域に根付かせる、あるいは埋め込むことは可能と考えるのでしょうか。」

ということですね。もう一つの質問は、

「都市の発達史に生活という視点を組み込む意義をもう一度説明して頂けませんか。今後の課題における仮説をどのように考えておられますか。」

これはちょっとあとまでとっておいたら良いと思いますが、以上です。

最後に池島さんへの質問ですが、まずこれは、できたら宇都宮さんにもコメントをお願いしますということで、安藤さんの方から、

「具体的な質問ではないけれども、次の問題をどう捉えれば良いのか、先行研究がありましたら教えて下さい。トヨタなど企業城下町の周辺地域の山村では、生産世代の大半は企業に勤めて生計を立て、物理的な過疎化をしていないけれども、生産活動、林業の放棄が起きている。これは通勤時間が一時間から一時間半圏を超えると家族の移動が起き、過疎化が進むという問題がありますけれども、このことをどう捉えたら良いのでしょうか。」

ということで、先行研究を、もし知っておられれば教えて欲しいということです。で、もう一つ池島さんの議論に対して、

「日本だけの問題ではないかと思うのですけれども、その普遍性はあるのでしょうか。」

ということです。そして宋君の質問で、

「農村の商品化の項目で、農村と農村の競合ということなのですからけれども、この競合の副作用が発生すると思います。例えば、ボランティア、自

然体験で発生する農山村の自然破壊など、農山村の価値を経済的視点だけで考えるのではなく、自然そのままの価値、例えば都市などで排出された公害などを沈静化することなどではないかと思っています。ちなみに、農村の概念が都市には存在しないものとして考えれば良いのではないかと思うのですが、その点どうでしょうか。」
 そのような質問です。

三重さんの方からですね、2つ出されております。

「等質的空間として捉えるならば、都市が発展すれば、農地は衰退するというゼロサムとの関係と考えればいいのでしょうか。農村の都市化、農村同士の競争が進んだ場合、商品としての農村は、よりレアのものになるのでしょうか。つまりプレミアムがついた、あるいはブランド化が出来た農村以外は消滅していくということもあるのか。」
 ということです。

最後ですけれども、佐野さんの方から、

「等質性と固有性の箇所に関わる所です。固有性が集積へのマイナス作用になるというのは、フランスの地域経済学が提示しているとありましたが、日本でもそのような研究はありますか。マイナス作用というと日本では、村落共同体において起こりうることとしていわれることがあり、社会関係資本などで耳にしたという記憶がありますので、その点について教えてください。」
 ということです。それでは、順番に答えていただきたいと思います。

水島：

ご質問ありがとうございます。今回の報告はですね、自分の研究テーマで、新たな分析視角を作っていけることができるかという試みでして、この上にさらなる展望を加える事はかなり難しいのですが、声を聞かせていただいた上で、お答えできればと思います。まず、佐野さんの方から「町並みを揃える為の法的な規制」、景観条例のようなもののイメージだと思うのですが、今も言いましたように、今回景観という言い方をしたときに、もちろん実際にはそういうことはあるのですが、景観が形成されてきた上での法的規制なのかなというイメージを持っています。なので、そうした認識の上において、法的規制の分析は入ってくるのではないかと思っています。

それから、横山さん、ありがとうございます。そうですね、使用価値の視点を導入するということで、例えば、百貨店と中小の小売業の対抗ということを考えるうえで、需要の側から考えたときに、

どこで何を買うかという選択に際して何を基準に行うのかということが必ず問題になると思います。既存の経済学だと価格ベースで考えると思うのですが、もう少しその使用価値の方に注目して見る必要があるのではないかという点が私の提案です。品質が良いものへの視点の不足ですとか、ニーズの外部性にどうこたえていくのかということにかんしては、そういうこともあると思うのですが、本報告では使用価値というものを私は考えてみました。そういうことでよろしいですか？

それから、リノベーションに関してお二方からご質問をいただきました。正直に言って、例として出したという意味合いが強いのですが、思いとしては、歴史分析でありながらも、現状分析にも通用する視点があるのではないかということの一例としてリノベーションを挙げました。リノベーションをする人のセンス等の問題については、今のところ、イメージとしては、もともとリノベーションしようとする人が備えている文化とか歴史というものに含まれるのかと考えています。収益地代の最大化に関しては、今のところイメージがわいてきていません。ただ、文化とか歴史の違いによって、どの建物を残すか残さないかということは、そこでの景観の、各地域の多様性に結びつくので、そういうところの説明のきかけにもなるのかということ、出してみました。あと、郊外化の影響に関してですが、今のところ、その今回の景観というイメージが、個々の建築物の変遷というところに片寄っているところがありまして、それが、その町並みとしてどう変化するかとか、自然的な景観とどう関係してくるのかということにまで、考えが及んでいないので、今後の課題とさせていただきたいと思います。

最後に名和さんの質問に関してですが、確かに生産拠点の変化等については、僕の報告では指摘していないと思います。生産拠点ということで考えると、宇都宮さんの方が近いのかなと思います。

岡田：

ありがとうございます。今の返答に関して質問者の方で、意図が伝わっていないなどの質問があれば再度お願いしたいのですが、はい、三重さん。申し訳ないのですが、質問される場合には、所属と名前をお願い致します。

三重：

京大大学院の三重です。商業地ということで、商業地においてはより地代を最大化するために、高度利用ということが言われています。それを水

島さんは歴史的に見ておられますが、経済的にみたときに、いわゆる高度利用に対しての低度利用を言うときに、水島さんが言われた、文化とか歴史とか、その使われ方ですね、そういったものが何かしら対抗として捉えることができるのではないかと考えているのですが、その点に関して、水島さんのご意見があれば教えていただきたいのですが。

水島：むつかしいですね…。そうですね。報告のときに、表現としては、“建物の使用価値”ということを行ったと思うのですが、価格面でとらえられないところへの注目という点では確かにあるのかなという気がしています。

岡田：

質問の意図を補足したものととらえていただければと思います。次に三輪さん。

三輪：

はい。まず富樫さんからの質問に対して、戦時体制と戦後の電波統制管理といった、国家の政策の果たした役割に関してですが、今回のところでは、地域内でのアクターばかりに注目してしまったので、政策面でのことについてはあまり触れていないのですが、1つ言えることは、日本で民間放送ができる前の、例えば戦時体制においても、電波統制、電波管制というものがあって、東京とか大阪の大きな放送局の出力も、夜間は落として、それによって米軍の飛行機が、都市の位置を把握できないようにする、そのために一方では、各地域にちいさな臨時放送局が作られたということがあります。それによって、NHKがほとんど周波数を独占していったと、それがほとんど解消されないまま、戦後の電波開放がおこなわれ、それが結局民放の開局に際して、大きな参入障壁になったと。席の数がかかなり少ない状態で入った。そしてどうするかというと、電波というものが国家の統制化にあるというか、国家の管理下にあるので、経済合理性が優れた申請者に対して与えるということ、結局大きな圏域というか広域ブロックという経済性が優遇されていったと。あとは民放の早期設置の、全国への設置の実現をおこなうためにも、周波数の最適配分ということで、圏域以外の小さな放送局の参入が排除されていったというような側面があったと。これが1つですが、国家施策というものは、1950年代に、地方の放送局に対して大きな影響を与えたと思っています。2つ目の情報の流通とメディア産業自体の事業、広告・販売収入と地域経済との実態に

支えられる関連性ということですが、情報の流通の場合、特に日本の県域メディアという場合には、記者クラブや共同通信社や時事通信社といった通信社を通じた情報独占というものがあり、新たな新規事業者が参入する際に大きな障壁になっていたということがあります。他方で、事業においては、先行する企業というものは、広告においても地元の企業との関係において、大きなコネクションをもち優位性をもっていただくと、これが後者に対しての競争優位の大きな源泉になっていた。

また、事業面と情報面との全国との兼ね合いとしても、情報面においても、全国メディア、特に新聞社が放送事業に参入するときには、電通辺りが情報面でサポートしたと、それで情報の偏在になった。広告等においても全国スポンサーを獲得する場合には、またこれも情報の偏在というか取引の偏在になったということで、この二つは対比できる面があるのではないかと考えています。

宋さんのところなのですが、ローカル性の実現と地域の不満の高まりに関しては、簡単に考えると、例えば、小さな市のメディア(人によってローカル性の認識は異なると思うのですが)、市とか県内の一部の地域とか、さらに県とかで、それが東北とか北陸とか大きなブロックになると思うのですが、ブロックが大きくなるにつれて、人がローカル性を感じる範囲は縮小していくと思います。結局、大きくなると全国一律の内容が中心になり、その地域独自の情報・番組は少なくなっていくので、それに対する不満は大きくなっていくと思います。次に、情報格差と地域格差ですが、よく言われることですが、各県の、特に田舎の県だと、見られるテレビのチャンネル数を文化格差だと主張する向きがあって、特にそれが一部の政治家にとっては政治の道具になっていったと。それによって、地方の小さな都市、県にとっても3局、4局ものテレビ局があって、それが今デジタル化の流れの中で共倒れになりかけているということもあります。また一方で、情報格差というものが地域のローカル性の独自性を作っていくと思うので、それによって、長野県とかの小規模な新聞が発展しているというのも、これはひとつの地理的格差、外部の情報が入ってこないという面が、逆に地域のメディアを育てているという側面であるといえます。

最後に、地域メディアに対する研究のアプローチに関しての体系的な説明ですが、簡単に言いますと、政治経済学、経済地理学、産業組織論の3つの分野に限って説明させていただきます。

最初に、政治経済学のところでは、経済だけではなく、地域にある行政であり、そのほかの文化団体でもあり、色々な市民、色々なアクターがどのように放送にかかわっているかということの本格的に研究する意味ではこれが1つの重要なツールであるといえます。産業組織論に関しては、基本的に日本は資本主義経済なので、メディア事業の担い手は、民間企業です。そのもとでの経済合理性を追求する最適化、立地などにおいて、その場合はどのように行動するのか、それをはっきりさせないと地方のメディアの立地の特異性も分からないということで位置づけています。経済地理学については、この場合プレッドは地域における公的・私的、そして視覚的な専門情報の循環が中心都市の成長と都市間の序列の安定化をもたらしたと指摘しています。これは1つの理論として珍しいというか、なかなか含意のあるものだと思ったので、経済地理学については、距離とか立地とか、地理的制約がメディアに対して大きな影響を与えるということで1つ入れました。この3つのアプローチを、空間という概念を通じて統合させていこうと考えていますが、今日の報告ではできなかったもので、これからの課題にしたいと思います。

岡田：

はい、かなり丁寧に答えてもらいました。時間の関係もございますので、追加的質問は抜きにいたしまして、できるだけ5分くらいでお願いします。

宇都宮：

はい。コメントありがとうございました。こういうのはちょっと苦手なので、徳永先生からのご質問で、「諸外国の事例と比較した場合、日本の企業都市形成の特徴をどこに求められるのか。」という点ですが、申し訳ないのですが、私は諸外国の事例に余り精通しておりません。特異性というよりは、共通性なのでしょうか。外国の企業都市研究は、主にマイニング・タウンといまして、鉱山町の研究が多くなっております。それは、鉱山が閉山して、その地域が何もなくなっていくという研究なのですけれども、そういった研究と日本の企業都市研究という炭鉱町の研究と共通した点があるということしか、今は申し上げることができません。ただ、今までの論点のサーベイの中で、日本の企業、企業経営の場合、日本的経営とよく言われるものが、それが地域に貢献していくといえますか、長期的関係などを強固にしていくという企業都市形成がよく言われることではあります。それは、

経済的關係が全面に出たものではないのですが、社会学の研究などからよく言われていることで、もししたら、日本の企業都市形成の特徴の一つかも知れません。

あとひとつ、「ハーヴェイやマッシーの議論で、その事例はアメリカとイギリスの事例であり、日本の事例研究のフレームワークとする場合、何らかの留保が付けられるのではないか。」という点ですが、おっしゃる通りだと私も思います。特にアメリカの都市形成に関しましては、アメリカを対象とする都市研究者の方からよく、私の都市論に対する指摘がありますが、日本とアメリカでは都市形成の仕方、なんといいますか都市構造が違うということでございます。こういった都市と日本の都市とを一緒に考えるのは、少し無理があるのではないかというのは、その通りだと思います。今後の課題のひとつではありますが、ひとつ考えられるのは、ハーヴェイの「資本の第一循環と第二循環」という考え方というのは抽象的なレベルの高い理論として捉えられることで、このところに大幅な変更があるということに関しては、感じていないわけです。今後実証研究を積んでいくなかで、そこを明らかにしたいと考えております。

岐阜大学の富樫先生からコメントを頂きました。ありがとうございます。1つ目が「空間的分業、企業内の空間組織のなかで個々の工場や事業所のポジションが変化していく点を、企業都市研究にどのように位置づければよいのでしょうか。」という質問なのですが、難しく分からないというのが正直なところそうなのですが…。

戦前の新居浜の事例を考えた場合、まだ撤退とかそういう状況ではないというのが現実です。戦後になって確かに新居浜の工場が、マレーシアやもしくは千葉といった広い土地がとれる所、宅地が安い所、労働力が安い所にどんどん展開していくという事実はありますが、しかしながら、新居浜に住友がずっとそこで操業しているということも事実としてあるわけです。そこをどのように捉えるのかということが、今後の課題でもありますので、考えていきたいと思っております。

2つ目で、先の質問と関係していますが、「旧型の重化学工業の場合、どうしても縮小・撤退が続いてきて、地域における役割が低くなってきますが、その上で企業側が事業の再構築や労働要員再編、インフラの再評価などで企業を地域に根付かせることが可能でしょうか。」という質問ですが、これも今後の研究の課題ではありますが、こういった企業側の事業の再構築、企業側つまり住友側の事情でそこに来る(進出撤退す

る)ということだけではなくて、例えば、住友によって住友の下請工場というものが新居浜にはたくさんありまして、その下請工場の技術が非常に高いという指摘が一部聞かれます。そういった意味で企業を地域に根付かせるというか、そういう形の意味での影響というものはあると思うのですが、基本的に私の考えとしては、分工場経済みたいなものはあまり意味がないのではないかと思っていますので、変更は必要ないのではないかと考えています。

さて、農学研究科の安藤さんから、「トヨタなどの企業城下町の周辺地域の山村では、生産世代の大半は企業に勤めて生計を立て、物理的な過疎化をしていないけれども、生産活動、林業の放棄が起きている。これは通勤時間が一時間から一時間半圏を越えると家族の移動が起き、過疎化が進むという視点がありますけれども、このことをどう捉えたら良いのでしょうか。」という内容のご質問ですが、戦前からの新居浜の研究の場合、職工農家の研究というものがああります。新居浜地域の周辺の農業をやっている地域から、兼業農家という形に変化してきてまして、一家の主は住友に通い、そうじゃない人達が農業をやる。そういった状況が実は戦前からできております。そういった研究は、暉峻先生という方がおやりになっている、農業経済の暉峻先生ではなくて、そちらのお父様の研究が大原社研のほうから報告がでております。

もう一つは、軍事にかかわる研究といたしますか戦前に国力維持や徴兵を目的にした調査があります。「山村経済実態調査報告」という調査がありまして、それで出稼ぎ労働者がでている地域の調査などを行っているものがあります(全国山林会連合会『山村経済実態報告書』)。

最後のどなたか分からないのですが、「都市の発達史に生活という視点を、もう一度説明して頂きたいのと、今後の課題における仮説をどのように考えているのか。」という質問でありましたが、空間の理論とかそういうものに繋がると思っていますので、共通の議論があると思っておりますので、その際にお答えしたいと思います。

岡田：

では、最後に、池島君お願いします。

池島：

では、簡単にお答えしていきたいと思っております。まず、佐野さんの質問で、「異質性としても固有性が集積にマイナス作用を及ぼすという研究が

フランスの地域研究にあるという話で、日本での先行研究はありますか。」という話ですが、僕はそこまでおさえていないので分かりません。ただ、今の経済学の主流派は、やはりそういう異質性というものを、マイナス作用として捉えている感があるので、これは主流派に限っていえることかもしれませんが、そのように捉えられる事象ではないかと思っています。

三重さんへのお答えですが、「等質的空間として捉えるならば、都市が発展すれば、農村も衰退するというゼロサムゲームの関係か。」というものですけれども、僕は等質的空間というものをそういったゼロサムのものとしては捉えてなくて、都市と農村とを媒介するもの、ヒト・モノ・カネというものが同じ次元で捉えられるようになってきているという捉え方をしています。貨幣をベースにしてということなのですが、そういったことで等質的な空間が成立したという考え方です。なので、勿論現在としては、都市が栄えて農村が廃れるという現象はありますが、これは必ずしも等質的空間だからというものではないです。

もう一点ですが、「農村の都市化、農村と農村との競争が進んだ結果として、商品としての農村はよりレアなものになるのか。」というのですが、これは、おそらくそうだと思います。なので、例えば知床が世界遺産に指定されたと、やっぱりみんな「行ってみたい」という思いがあるけれども、人が押し寄せることによって自然が破壊されるという側面、ジレンマはあると思うので、これは、三重さんの指摘される通りであると思っております。

宋さんからの質問で、「農村と農村とが競合することによって副作用が発生するのではないか。」ということなのですが、もちろんそうだと思います。ただ、ここで僕が言いたかったのは、農村と農村がお互いに切磋琢磨するといった関係であり、対立的なものとして捉えていません。「あそこの村ではこれをやっているの、うちの村でもやってみようか」と。だけでもそこまでの能力は無いし、お金もないし…というように、農村にもいろんな農村があると思っております。ただ、都市と農村は二元論的なものではないので、都市という外部の存在に対して、農村が農村同士でいろいろと考えていく。そういった関係が最近あるのではないかという感じで指摘させていただきました。

無記名なのですが、「都市と農村との問題について、日本だけの問題ではないと思うがその事例はありますか。」というもののなのですが、「農村の商品化」のところでも話したように、あれは、イギリスで起こっている研究です。イギリスは先進国で日

本と同じような状況になりつつも、だけでも食料自給率は日本と大きく異なります。そういった面で僕は、最後に指摘したのですが、農林業生産としての農村、そういった視点を大きくもたなくても、消費部門、農村の商品化だけで議論を進められるというのがイギリスの特徴ではないかと思いません。他の先進国といっても、やはりアメリカやフランスなどの農業国とまた日本とは違うので、先進国を一括して捉えることはできないと思いますが、ある程度日本だけの問題でもないという指摘はその通りであると思います。

後、安藤さんからの林業についての先行研究についてのお話なのですが、先行研究については、僕はちょっと分からないのですが、林業というのは、農業以上に木材を商品化するのに時間がかかるものだと思います。ただし直接目に見えて、日本人が「林業が廃れたから自分達の生活が困る」といった事態に陥っていないという感覚があるので、どうしても(林業への視点がおろそかになっていると思うのですが、最近の集中豪雨による九州などによる土砂災害、あいつた事例は、やはり木材を商品化するという動機が落ちていって、(山に)手が入らない。安い木材を中国から輸入することによって起きている現象ではないかと僕も考えるところです。ただ、ここら辺の議論がクローズアップされてない、経済学においては特にクローズアップされていないと思います。足早でしたが以上です。

岡田：

はい、どうもありがとうございました。ということで30分以上経過しました。個別報告の内容を共通に了解したかったので、こういう時間をとったのですけれども、残り時間は30分を切ってしまうしております。ですので、いきなり共通的な論点での議論で大変だとは思いますが、総合討論に入っていきたいと思えます。

今日の皆さんの報告を聞いていますと、それぞれ専門の研究対象、具体的問題が違います。水島さんの場合は、京都の戦前、戦間期の中心市街地であり、三輪さんであれば、1960年代の放送局を作っていく県とか市、宇都宮さんの方は、新居浜で、池島君の方は、日本の今の農村がイメージされているのではないかと思います。実はそのなかで、当然、地域経済学の宿命でもあるのですけれども、他の領域、すなわち都市計画、あるいは建築、あるいは文化、あるいは政治や行政というように、その隣接分野との関係も、当然抽出する必要があります。

そして、もう一つには様々なアプローチがあります。主流派という表現がありましたけれども、新古典派のアプローチもあれば、政治経済学的なアプローチもある、あるいは制度経済学的なアプローチもある、というような形があるわけです。その中でおそらく、その研究対象が持っている豊かさ、地域そのものにたくさんの繋がりがあるなかで、生産も消費も文化も政治もあるわけです。それを学問レベルでどのように対応して組み立て直すのかというところが、私達経済学者の共通の課題ではないかと思えます。そのなかで「使用価値を重視しよう」あるいは「消費というものに着目しよう」、あるいは「景観」、いわゆる目に見えるものに注目しようという、共通の問題意識があるように思います。

純粋経済学のように、貨幣的なものだけでは、捉えられない問題がかなり出てきています。特に、それが人間の生存基盤そのものに関わる環境問題、公害問題などに思いを馳せることが当然必要になってきているのであります。

そのなかで、今日語られた話のなかで「地域」という概念と、もうひとつ「空間」という概念があり、今日のメインテーマは「空間」になっています。私は、はたしてこの2つの概念は同じだろうかという疑問をもっているのであります。この点については論者によってかなり違う捉え方をしているように思われます。そこで、皆さんが地域・空間というものをどういうふうに捉えて、今日報告されたり、あるいは日常的に研究されているのか、こここのところをお話してもらいたいと思います。

それを踏まえまして、フロアの皆さんと一緒に意見交換していくというような展開で、シンポジウムを進めて行きたいと思えます。今度は、逆方向から行きましょうか。池島さんの方から順番にもどっていくということでお願いしたいと思います。

池島：

では、僕の中で「地域」と「空間」というものは、定義しますと、地域というものは、具体性を持った一つの領域、空間というものは、かなり抽象的なもの、普遍性を前提として議論する、そういうものだと考えています。今回の僕の報告は、かなり抽象度の高い議論でしたので、個別性というものはあまり意識できなかったのですが、報告にひきつけて言えば、都市と農村が対立しているという事態が実感としてはわかります。しかし、都市にあこがれる農村の人々の気持ち、そういったものが、一体どこから生じるのかということ突き詰めて考えると、貨幣的な価値に汚染されてしまった、と

いっていいのかわかりませんが、そういったものが根底にあるのではないかというのを現代日本の農村を考えながら抽象度を上げて、議論させていただきました。

宇都宮：

私の場合は、元々地域経済理論で言われている生活といますか、岡田先生も生活について議論されていますが、特に農村の生活をどうするのかとか、宮本先生も都市生活者の議論があるわけですが、生活そのものの形成とかそれが地域にどう影響を与えるのか、もしくはどうものを作っていくのかということはまったくその議論からはわからなかったのですが、建造環境も集積ということで、建造環境を作り出す主体が、経済循環の中でどのように目に見えてくるのかということ考えた場合に、建造環境、特に生産だけではなく消費のための環境が集積していく過程、それが視覚的に都市空間だと認識できること、それからもう1つは、建造環境を創出するには、もちろん財政的背景が必要なのですが、それが建造環境の創出とともに出てくる。その中で自治体の空間、地域経済の下になる、そういう認識です。空間という抽象的な概念に関しては、こういった議論を重ねていくことで、もう少し、確実なものが考えられるのではないかと考えています。

三輪：

私の場合は、まず一応レジュメにも書いていますが、従来では、地域というものを簡単に全体の中の部分としていたのですが、しかし、マクロ、ミクロ、さらには他の地域といった縦と横との関係性の中で把握しなければならないと思います。その地域の中に、地域とは限らないですが、その切り口として空間というものを設定しています。もし地域としてある切り取られたエリアを対象にする場合には、そのエリアに完結するものもあれば、完結しないものもある。さらに、小さい空間もある。それらの空間というものが、マスメディアというものの領域において、統合したり分化したり、対立したりしているというように私は把握してとらえようとしています。

水島：

正直に、今の段階では答えは出ないのですが、そうですね、難しいですね。

岡田：

他の3人のコメントを聞いてでもいいので。

水島：

そうですね、3人の中では三輪さんに近いのかなというイメージがあったのですが、それとともに僕が思ったのは、その中で生活している人間の構造的空間が形成されていくという視点があって、いくらでも伸び縮みするものなのかと考えています。

岡田：

地域というのは、場である。人間が生活する場であると考えていいのですか？

水島：

そうですね。

岡田：

というようなことで、地域経済学なり経済地理学で、一番重要な概念をめぐる議論で、いろんな捉え方がありますし、議論をはじめると、延々と続く議論になります。おそらく方法としての地域ないし空間をどう考えるか、あるいはどう活用するかということにですね、会場に来られている皆さんも地域経済に、関心を持って研究されていると思うのですが、そこでも実証研究をしながら、理論化をどう図るか、あるいは、これまでの既存研究の中に自分の研究をどう位置づけ、どのような新しい論を作るのかということを考えたり、悩んだりしていると思うのですが。どうでしょうか、会場の方で発言したい方はいらっしゃるでしょうか？それでは、富樫さんにコメントをお願いしたいと思います。

富樫：

僕は地理学なので、地域と空間に関しては色々考えるのですが、ひとつは、松原さんや水岡さん、藤田さんのように、地域経済や経済地理は空間だけだというのは私は反対で、もっとその組織をきちんと扱うべきであると考えています。そうすると、さきほど徳永さんからお話があったように、日本とアメリカやヨーロッパを同じ土俵で議論できると思います。空間からいかずに一般論からいくということも当然あると思っています。

2つ目は、シンポジウムの案内をもらったときに、経済学では意外な、「固有性」という言葉が出てきて、あれ？と思ったのですが、いきなり特殊性という点でやると、我々地理学の昔の悪いところに戻ってしまうので、もうそれしか言わない状態になる。当然、自然環境もあるし、文化や歴史もある

し、それからコミュニティや家族、ジェンダーもある。こういう関係がいろんな形が組み合わせることによって、region や place が出来上がると思うので、いきなりあるものをそのまま認めずに、なぜこうなっているのかということを考えていいではないかと思えます。もっとも space という言葉は意味が広い。宇都宮さんが生活空間とっているように、小さいものから大きなものまでであると思えます。

3 つ目は、メディアの問題もそうなのですが、ローカルメディアが強いということは、地域のアイデンティティがしっかりしているということですよ。何がなんでも、その、国のレベルとかグローバルに行くわけではないので、普段の生活の場で、自分達の地域を市民の手でどう見直すのかという議論になると思うし、そこにコミュニティのあり方、ガバナンスのあり方が出てくると思うので、経済学の枠組みを越えて、政治経済的なアプローチになると思うので、今日の報告を聞いていてもそのような方向に行くのだろうなと思いました。

岡田：

どうもありがとうございました。パネラーの皆さんには、あとで感想を含めてコメントしていただきたいと思うのですが、徳永さん、いかがでしょうか？

徳永：

関西大学の徳永です。あの、常に外国を研究している立場から見ると、地域という言葉は非常に危険な言葉でもあるんですよ。つまり英語で言うと region と local という言葉がありますが、日本語に直すと両方とも地域という言葉になりますが、いわゆる欧米人の感覚からすると、これらは生活環境の中で全く異なった概念になります。そこにコミュニティ、エリア、テリトリーという概念も入れていくと、日本語では十分につたわらないようなものがあると思うのです。私が先ほど宇都宮さんにあのような質問をしたのは、おそらく日本人という枠の中で、地域とか空間という言葉ひとつをとっても、おそらく日本の中でしか通用しないのではないかという印象を日本の研究からうけていまして、もし空間とか地域というものをもしこういう形で議論するならば、ここからはコメントですが、ぜひ空間とか地域とか言うものをサーベイして、パネリストの共通の理解にして、土台を作ったその中で、自分の見解を位置づけていくことが必要であるように思います。4 人のパネリストの見取り図があればよかったのではないかと思います。

私も経験があるのですが、シンポジウム、つまりパネリスト形式のシンポジウムは大変難しく、あ

る学会のパネリストをしたのですが、まあ無茶苦茶なシンポジウムで、とにかくばらばらな報告が単に 3 本あって、それをまとめただけというような感じでした。そういうことを避けるためにも、シンポジウムとして 1 つの共通のテーマをかつちり作る時には、ここに書かれている趣意書の中味がもう少し参加者にも伝わるような形で、4 人が何を共通にして、共通の問題意識を持っているのか、自分達の知識だけではなく、それを専門にしている文献をサーベイして出してみるというのも 1 つの方法だと思います。今日私が持っているのは、Clark, G., Feldman, M. and Gertler, M. (eds.), *The Oxford Handbook of Economic Geography*, Oxford, New York: Oxford University Press, 2000 という文献ですが、この手の文献は欧米ではたくさん出ています。その時々学者が、一言物言いたい人が書いていますが、日本でこの手の文献があるかはわかりません。しかし、おそらく理論的な研究をされている人は空間とか地域とは何か、ということ学会等での捉え方に関してのサーベイ的なものがあれば、もっと良かったのではないかと思います。

岡田：

ありがとうございました。今日の企画に関する大変シビアな問題提起でもありましたが、地域経済学というのは、理論だけではまずい、現に地域で起こっている問題をいかに解決するか、いわゆる政策科学的なものです。そういうものとして鍛えなければならないということ、島恭彦さんは言われています。

このへんでまとめの時間帯に入ります。富樫先生と徳永先生からコメントをいただきました。それを踏まえうえて、感想と自分の研究にどう生かすかということコメントいただきたいと思うのですが。

水島：

今日この場を借りて、ずっと長い間ここにいるのですが、研究視角ができなくて、そのまま時間が過ぎていたということもあるのですが、今日できかけができたのかなと思っています。皆様からご質問いただいて、個別の研究を深めていけるというか、できるだけ有効に活用していきたいと思いました。

三輪：

私も水島さんと一緒に、自分の姿勢がどこにあるのかを認識する場になったと思っています。

理論と実証に関して、抽象的に考えることはあったとしても、自分の考えに沿ったところで、考え直すいい機会になったと思っています。

宇都宮：

今日はありがとうございました。私にしてみれば、富樫先生や、徳永先生のコメントは非常に意味があって、これから自分も厳しく研究に当たりたいと思っています。ドクターでの悩みは孤立化といいますか、互いに無関係という空間が形成されていると思います。それが地域経済学研究で作られるのかはわからないのですが、視野も考え方も、違う人たちが集まってこういう会ができたのは、1つの大きな成果でして、今後もっと内容的にも充実させていけたらと思っています。

池島：

最後に徳永さんから厳しいコメントをいただきましたが、それくらいの準備はしてしかなるべきだと思っていますし、ここには、それくらいできる人たちが集まっていると思っています。個人的には、今回は、修士論文とは全く違う分野での報告をしましたが、ただ、その僕の中では、経済的な側面の中にもやっぱり人間のいろんな意識がある、けども、その意識がどうしても表面上あらわれてこない、その内面に抱える矛盾をどうにかして出してみたいと思っています。日本の農村の過疎状態を何とかしたいのだけれども、どうしたらいいのかわからないというところで、今回は試論的なところでこの場を利用させていただきました。議論の整理はともかくとして、この場を与えていただき、ありがとうございました。

岡田：

最初に話しましたが、今回の企画自体は、私の方から言ったのではなく、院生の方からの提案で、こういう「空間」が形成されました。個々の研究はばらばらなのですが、方法なり、基本的な文献、エッセンスをお互いに共有しようではないかということが、狙いとしてあったのではないかと思います。徳永さんが指摘されましたように、会場も含めて、そういうことをきちんと共有するためには、時間的な問題、方法的な問題を含めて、まだまだ課題が多いのではないかと思います。事前の勉強会では、4人のところでかなり議論しているわけですが、短時間でそれをしゃべるには、なかなか難しいことでもあったと思います。今後の研究会の企画の仕方についても、個別研究報告方式の従来の研究会とあわせて、こういうシンポジウム

を開くというのは、大きな意義があります。大学院生時代にパネルに出るというのは、めったに経験できることではないので、プレゼンの仕方からはじまって、ケンカするくらいまで議論したようです。その結果、宇都宮さんが言っていたように、蛸壺型の研究空間が、統合されてきたのかなと思っています。ともかく、これから地域経済に関わる研究をされていく方ばかりですが、理論と実証をどうつなぐのか、ということに関して、今回は足場を作ってもらったと思います。是非、個別の研究に入っていくながら、それを一般化していく努力を怠らせずにやっていただきたいと思います。

蛇足になりますが、修士論文、博士論文の指導をしてきて、やはり弱くなったと思うのは、研究サーベイです。研究史をしっかりと押さえていくことで、自分の研究を相対化し、自分の位置づけを行って、課題を設定し、実証していく。これは自分との戦いです。自ら強制しないことにはものになりませんので、努力してもらいたいところです。

